

この教義をかかげているし、またメソジスト派の内部でも、……初代メソジストの偉大な説教者であり首尾一貫した思想家でもあったホイットフィールドも……『特殊恩恵説』の信奉者だった」(216頁)。

さらに、ウェーバーは、予定説が16・7世紀にカルヴィニズムのもっとも特徴的な教義とされ、また一般に、今日でもそう考えられているという事実を語るが、それが改革派教会の「本質的」教義であるか、「付随的なもの」であるかについては、議論があったということもはっきりおさえた上で、予定説を取り上げるのはそういう価値判断の観点からではなく、文化史的な影響という点でのその重要性という観点からであることを強調している(144-145頁)。また、予定説の内容についても、その教理自体が問題なのではなくて、ウェーバーのテーマである近代文化の禁欲的性格という特色、つまり生活全体の組織的・合理的な形成ということに対する、きわめて卓越した心理的影響力・推進力という観点から見るのだということも明らかにしている(218-219頁)。そしてその際、「考察の方法としては、宗教思想を、現実の歴史には稀にしか見ることのできないような、『理念型』として整合的に構成された姿で提示するほかない」(141頁)と述べて予定説を扱う彼のユニークな方法に注意を喚起している。したがって、カルヴァン、またカルヴィニズムと予定説についてのウェーバーの所説を考える際には、彼がこのようなさまざまな自己限定を加えた上で、議論を進めていることを十分に念頭におくべきで、単に思想的・神学的観点からアプローチしても見当外れにならざるをえないだろう。

二

それでは、ウェーバーが『倫理』論文第二章で

カルヴィニズムの予定説をどのように扱っているかを具体的に見てみよう。まずウェーバーはカルヴィニズムを最初に取り上げる理由を述べた後、「当時この信仰のもっとも特徴的な教理とされ、今日でもそう考えられているのが恩恵による選び(Gnadenwahl)の教説である」(144頁)という言葉で、カルヴィニズムを予定説に的をしぼって論じていくという意図を明らかにするが、その際、「その内容を知るために……権威ある典拠として1647年の『ウェストミンスター信仰告白』を引用しよう」(145頁)と言って、その中から6項目を抜粋して、この教理の内容紹介にあてるのである。しかしながら、そのことは、彼が「ウェストミンスター信仰告白」にもとづいて予定説の概念構成をしたということ必ずしも意味しない。むしろ、それとは独立に彼自身の予定説理解があって、その概念に合致するものをこの信仰告白から選り出し、予定説の説明に当てたのではないかという疑いがでてくるのである。事実これに続く箇所では、この教理の成立とその歴史的展開について簡単な叙述がなされ、そのなかで、カルヴァンの予定説の解説というかたちで、その後の議論の前提となる予定説の根本思想というべきものが提示されている。前の箇所につけた註(150頁)で、「ここで考察しようとするのはカルヴァン自身の見解ではなくて、カルヴィニズムであり、それも16世紀末葉および17世紀の……カルヴィニズムである」と断っているところから、ここでカルヴァンといっても念頭にあるのはカルヴィニズムだということもできようが、そのカルヴィニズムの根本をなすものとしてカルヴァンの思想がここで提示されていることは疑いえない。したがって形式的にみても、ウェーバーがカルヴァンの予定説の根本的思想として提示した概念が先にあって、そこから「ウェストミンスター信仰告白」が眺められ、用いられているのではないかと考えら

ストの有力な指導者で、いわゆる第一ロンドン信仰告白の第二版(1646)に署名し、第二ロンドン信仰告白(1689-総会で正式承認)ではその作成の中心人物の一人として署名者の先頭に名があがっている。ただわからないのは、ウェーバーが言及するこの Hanserd Knollys Confession あるいは Declaration という名前のものがちょっと見当たらないことである。1689年という年代と訳書145頁、170頁注(4)、190頁注(9)、216頁などの記述は上記の第二ロンドン信仰告白と完全に一致するので、それを指しているように思われるが、それを Hanserd Knollys Confession あるいは Declaration とよぶ呼び方があるのかどうか、わからない。そのうえ、150頁注(4)の説明と注(6)でわざわざ(アメリカの)と付記していることが第二ロンドン信仰告白と合致しない。これはどういうことであろうか。いずれにしても今後の調査に待ちたい。